

プレゼンテーション授業における相互評価に関する事例報告

The anecdotal report about the mutual evaluation in a Presentation class.

池村 努^{*1}

Tsutomu IKEMURA^{*1}

^{*1} 北陸学院大学短期大学部コミュニティ文化学科

^{*1} Community and Culture Department, Hokurikugakuin Junior College

Email: ikemura@hokurikugakuin.ac.jp

あらまし：プレゼンテーションにおける評価基準としてルーブリックを取り入れ、WEB ベースで学生の相互評価を行う手法についての研究結果について報告を行う。

キーワード：プレゼンテーション、ルーブリック、相互評価、アクティブラーニング、

1. はじめに

昨今、学生は卒業後に即戦力となるよう、企業が求める様々な能力を身につけることが期待されてきている。結果として教養教育が軽んじられることとなり、大学の専門学校化が危惧されるようになってきた⁽¹⁾。これに対し、学生としての能力を向上させるために、各省庁で様々な提案や、調査結果、答申が出された。厚生労働省では2004年(平成16年)に「若年者の就職能力に関する実態調査」結果を発表し、「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」が採用可能性に関わっていることを表した。経済産業省では2006年(平成18年)に学生の間身に身につけておくべき能力として「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を「社会人基礎力」と定義した。文部科学省は2008年(平成20年)の答申により、学生に望まれる能力を「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」としてまとめ、これを「学士力」とした。

「プレゼンテーション演習」を通じて「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」を強化することが期待されることから、著者の所属する大学でも2005年度よりプレゼンテーションに関する資格取得を学生に勧め、多くの資格取得学生を輩出してきた。今回はプレゼンテーション演習における評価方法の考察と、新たに取り入れた取り組みについて報告する。

2. 研究概要

本研究はプレゼンテーション演習において、効果的な相互評価方法を構築することを目的としている。従来プレゼンテーション発表の相互評価を行う場合は、発表を聞きながらメモ書きしたものに基き、口頭による相互評価を行う方法が主流だった。筆者の授業でも予め配布したため評価シートに感想を記入させ、これを発表終了後に意見交換することで、相互評価を行ってきた。上述の方法に対し、近年相互評価をコンピュータシステムやWEB上に置き換える手法が幾つか提案されている⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾。これらを参考に、本研究でもWEB上で実施出来るアンケートサ

イトを用いて相互評価を行う手法について検討した。

研究の順番として、初めに筆者がこれまでに授業内で取り入れてきた相互評価の手法を確認、整理を行った。プレゼンテーションを実施する上で注意すべき点を洗い出し、それぞれの評価を行った上で優先順位をつけ取り入れる評価基準とした。

次に、評価を数値化する手法としてルーブリックを取り入れた。ルーブリックとは「『目標に準拠した評価』のための『基準』つくりの方法論(中央教育審議会高等学校教育部会「ルーブリックを活用したアセスメント」関西国際大学学長濱名篤)」と定義され、評価基準をマトリックス形式に配置した評価指標のことをいう。ルーブリックに評価基準を明示することにより、学生が客観的に評価できることを期待した。

表1 評価基準

分類	観点
内容	ポイントは明確だったか
	本論から結論が導き出されているか
資料	資料は見やすいか
	資料の色使いは適切だったか
	文字の大きさは見やすいか
	1ページ毎の文字の量は適切か
発表	導入部は興味を引く内容だったか
	視線は聴衆を意識していたか
	声の大きさは適切だったか
	コミュニケーションチャンネルは有効に用いられていたか
	気になる「クセ」は無かったか

最後に、ルーブリックをWEBアンケートの形に置き換え、発表時にアンケートサイトを閲覧できるように整える。学習管理支援システムが整備された環境であればそれを用いることが可能だが、本学ではその環境が整っていないため、WEBベースでのアンケート実施を選択した。

3. 相互評価基準の確認と整理

従来の「プレゼンテーション演習」授業で用いて

いた評価基準（表 1）を表す。学生はこの基準に沿って感想をメモし、発表終了後相互にコメントの交換を行っている。評価するポイントは「内容（文書構成）」「資料（プレゼンテーション資料作成）」「発表（口頭表現）」の三点となっている。

表 2 ルーブリックを用いた評価基準

分類	観点	基準
資料	内容	全てに適切な材料が整っており、要求された内容が記述されている
		材料は十分に揃っているが、記載内容に不備がある
		材料が不十分で、内容に不備がある
	文章構成	文章は論理的な順序で記述され、視聴者は内容を容易に理解することができる
		文章は論理的な順序で記述されているが、部分的に校正不足の記述がある
		不適切な表現や、日本語の文法に誤りがある
	ビジュアル化	図や表、図解などが効果的に用いられている
		視覚に訴えかける工夫がされている
		文章だけで構成されている
発表	発表姿勢	聞き手を意識して発表できている
		聞き手を意識しようという、努力は見られる
		聞き手のことを考えずに発表している
	発声	はっきりと大きく発声している
		声は大きいが聞き取りづらい
		小さな声で聞き取れない
	アイコンタクト	聞き手を見ながら発表している
		聞き手を見ているが、すぐに手元/画面に視線が行く
		手元の資料ばかり見ている

「内容」は聞き手にとって説明内容が明確であったか、本論から結論への導きが行われているかという 2 点について、「言語コミュニケーション」の観点から評価を行っている。構成作りの際に注意すべき点として、論理性や語句の使い方について意識して作成されているかが評価対象であり、「わかりやすい文言」で作成が行われたかどうかを評価している。「資料」では PowerPoint 資料作成時の注意点についてであり、「見やすさ」と「わかりやすさ」という視覚資料としての観点から評価している。特に PowerPoint 初心者は、わかりやすさより自分の好みに傾倒しがちとなるため、他者の資料を見ることと、他者から評価を受けることが重要となる。「発表」では主に「非言語コミュニケーション」と「準言語コミュニケーション」について評価している。アイコンタクトや身振り手振りの他に「準言語コミュニケーション」としての声の大きさ、話す速度などについても確認を行っている。

これをもとに評価する観点の見直しと整理を行った。評価する観点は基本的に従来の基準を引き継いだ。さらに今回はルーブリックの技法を取り入れ、客観的な評価が行えるよう基準を明確にし、誰が評価してもほぼ同じ結果となるように基準を作成した（表 2）。課題作成時に学生にルーブリックを提示することで、作成するプレゼンテーション資料の完成度が高まることも期待できる。

4. WEB アンケートへの置き換え

従来は、プレゼンテーション終了後に相互評価を行う際、評価シートに記入した内容を肯定的な表現に置き換えて伝えるよう指導していた。例えば改善すべきポイントについて「このように改善すればより良くなる」というように伝える。これは口頭で評価を伝える際、遠慮して正確な評価を下さなくなることを避ける目的で取り入れたもので、肯定的表現を用いることで改善点が明確に伝わることを期待したものである。

今回 WEB アンケートに移行したことによって、評価者の匿名性が保たれることから被評価者に遠慮せず、正確な評価が行われることが期待される。また、コメント機能も備わるので、評価基準外の感想も伝えられるよう設定した。

WEB アンケート化においては、インターネット上の無料アンケートサービスを用いた。ルーブリックをアンケートに対応させることは容易で、サービスの機能を活用することで集計の効率化が図られることを期待している。

5. 現状と今後の課題

WEB アンケートの運用を 2013 年度前期科目から開始した。当初はブラウザを起動したパソコンの前に着座した状態で発表を聞くようにしていたが、後にプレゼンテーションを 1 名ずつ行い、通した発表が終了した後、まとめてアンケートに回答する方式に変更した。同様の研究の中ではプレゼンテーションの進行中に理解度を記録する手法を取り入れているものもあるが、現段階では非効率的であるが、まとめて入力する方法がベターであると考えられる。

評価項目については今後も見直しを行い、より学習効果の高い評価基準とすることが必要と考える。

参考文献

- (1) 早稲田大学 Campus Now Online:“大学の専門学校化”2005/4(2013.6.1 閲覧)
- (2) 亀和田慧太,西本一志:“徴収の注意遷移状況を提示することによるプレゼンテーション構築支援の試み”情報処理学会論文誌,Vol.48 No.12(2007)
- (3) 山下祐一朗,中島平:“プレゼンテーションスキルとわかりやすさの関係分析-レスポンスアナライザによる評価とアンケート分析の比較-”,日本教育工学学会論文誌 Vol.34,Suppl(2010)
- (4) 山本恭子,河野浩之:“学生相互評価によるプレゼンテーション能力向上”,ICT活用教育方法研究(2010)